

庭木に利用する樹種の特徴と管理

～ アカマツやクロマツに発生する病気とその対策 ～

(一社) 日本樹木医会富山県支部

樹木医 西村正史

クロマツやアカマツ（以後、マツ）は現在でも庭木の代表的な樹木であり、多くの家庭に植栽されています。しかし、残念なことに病害虫が多発する代表的な樹木でもあります。

害虫が発生した場合はその幼虫が針葉を食べるので、葉が急に少なくなったり糞が落下したりします。しかも、幼虫は比較的大きいので被害の状況を比較的簡単に確認でき、早期の防除が可能です。

ところが、病気が発生した場合は針葉の一部や全体が枯れますが、その症状から原因となる病原菌を特定することは困難です。

そこで、私の仲間である県内の樹木医が平成30年（2018年）から令和7年（2025年）までの間に取り扱った14事例から、マツの病気に対する対応を検討してみました。

1 マツに発生した病気

最近の8年間に本県で発生したマツの病気は、すす葉枯病、赤斑葉枯病、葉ふるい病、ペスタロッチア葉枯病、ディプロディヤ病、シュードサーコスボ菌による葉枯病の6種類でした（図1）。最も多い病気は、ペスタロッチア葉枯病、次に多いのが葉ふるい病、3番目に多いのが赤斑葉枯病でした。また、14事例中8事例は単独の病原菌による病気でしたが、他の6事例は2種類あるいは3種類の病気が同時に発生していました。

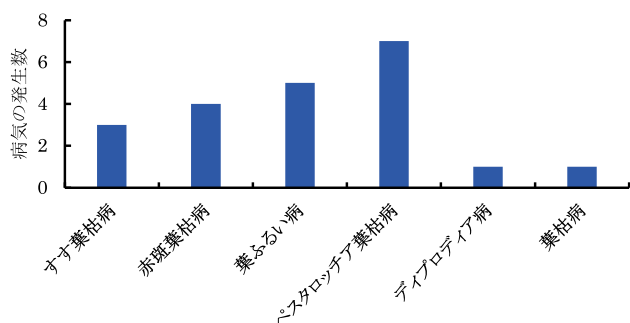


図1 平成30年から令和7年までに県内のマツに発生した病気の発生数の頻度分布。横軸の葉枯病はシュードサーコスボ菌による葉枯病のことです。

なお、この解析には名畑樹木医作成による病害虫診断ノートを使わせていただきました。

2 マツに発生した病気の対応

庭木のマツの針葉が枯れると景観が悪くなるので、何とか対応しなければなりません（写真1の左）。そのためには、マツの樹冠全体を見て病気以外の兆候があるか否かを判断してください。見方としては、①マツの樹冠下に糞が落ちているか、②幼虫がいるか、③針葉全体の緑色が退色しているか、です。①と②はマツカレハ等の幼虫による被害ですので、殺虫剤等で対応できます。③の場合はハダニの被害とマツノザイセンチュウによる被害が考えられます。前者であればハダニ剤で対応できますが、後者であれば残念ながらマツ全体が枯れてしまっているので、伐採せざるをえません。①から③までの兆候がなければ、前節で説明した6種類の病気のいずれかが単独で発生したか、若しくは、複数で発生したと判断してください。

対応としては、まずは被害を受けて落下した針葉を丁寧に集めるとともに、マツに残っている被害針葉も取り除いて一緒にゴミとして処理し、その後で殺菌剤を散布してください（写真1の右）。登録のとれている殺菌剤は、キノンドー水和剤（500倍液）、ドウグリン水和剤（1000倍液）、トップジンM水和剤（1000～2000倍液）、Zボルドー（800倍液）です。



写真1 クロマツに発生した病気の被害状況（左：2023年4月19日撮影）と被害針葉処理と殺菌剤処理後の状況（右：2023年8月29日撮影）